ブルーラビット…鞠井雪路。レースクイーンとしての仕事に加え、ナブール帝国の侵略を防ぐため昼夜問わず戦う彼女の肉体は限界だった。精神的疲労、肉体疲労…それもある。
だがそれよりも何よりも今彼女を苛むのは…

肩凝りだった。

博識なる読者の皆様方ならご存知であろう。巨乳の方がその胸に備えているものの重量は、サイズによるが2キロ前後はあるということを。
そんなものを支える上半身の筋肉…特に肩は非常に凝るものだという。
巨乳を超える爆乳と呼ばれる雪路の胸の房の重さは…語るにも涙が溢れそうなものである。

帝国の侵略を受ける前、ただの一般市民であったときは月に一度の整体通いを欠かしたことはなかった。しかし、今はそんな暇もない日々を過ごしてしまい彼女の肉体…というか、肩は限界を超えてしまった。
先日もナブール帝国との戦闘中、あまりの肩凝りの痛さに泣き出し、駄々をこねて怪人を困らせ、肩揉みを強要し、あまりにもへただったのでキレ散らかして手に負えなくなったので撤退させるという珍事を起こした。

行きつけであった整体院に連絡を取るべくウェブを検索するも行かない間に閉業してしまっていることを知り愕然。
しかし、他を見つけようと調べていくと数週間前にリニューアルオープンしたという異様にレビューの高い整体院を見つける。運よくすぐの予約が取れるようなので申し込む雪路。

翌日、案内通りに訪れた整体院。微妙に人気のない山の中腹にあるそれは、やや古めではあるが中華風の建物にリフォームされている小さめの小屋だった。
雪路も正直あまり良い印象ではないがレビューを信じ入店。中はかなり綺麗になっており、チャイナドレスを着た受付の女性店員が出迎えた。

待合室に通された雪路は渡された薄手のリラクゼーションウェアに着替えて施術所に入る。そして女性店員から、血行を良くする薬膳茶と言われた飲み物を手渡されそれを見た。

…やや黄色がかった白濁したどろりとした液体。臭いは薬というより…イカ臭い。
どう見ても普段ナブール帝国に飲まされている男性の精液にしか見えないが、ニコニコとこちらを見てくる店員の手前どうにも出来ず、グイッと一気に飲み干す雪路。
味、生暖かさ、生臭さ、喉に絡むえぐみ。
どれをとっても想像通りのものでげんなりする雪路。

しかし確かに血行を良くしているようで、すぐに体が暖まってきた。うっすらと汗ばみ、乳首は尖り、股ぐらが濡れそぼる。
いやこれいつものアレじゃないです？発情させられてないです？
と一瞬頭をよぎるが、感覚もポーッとしてあまり上手く思考できない。

「ではこちらにお手荷物をお願いします。
それとこちらのアイマスクをして伏せて、施術終了までそちらを外さずお待ちください」
言われるがままに携帯端末や変身アイテムのビーストコマンダー、着替えなどを籠に入れ、ベッドの横に置く。そして手渡されたアイマスクを装着し、顔の部分があいたマッサージベッドにうつ伏せで寝転ぶ。
間もなく奥のドアが開く音がして、「どうも、本日担当させていただきますウナギです。ああ、起き上がらなくて大丈夫ですので」と挨拶された。

「では初めて行きますね…」と、整体師が声をかけ、背中をほぐしていく。全身に電流が走るような感覚。気持ち良い。これまで受けてきた整体とはなんだったのか？
凝り固まった背中が液体になるような感覚だ。その中をウナギが這っていく感覚…。
なぜか少しピリピリと電気のような痺れを感じるが、これも体内の電気信号がどうのこうのなっている証拠だろう…と、雪路は自分を納得させようとした。

「いや、でもやっぱこれはおかしいですって！！」

跳ね起きた雪路はそのまま施術していた相手の腕を掴む…が、それはにゅるりと彼女の手から滑ってしまう。まるでウナギのように…。
精液のようなお茶。発情する肉体。なぜか顔を見せようとしない整体師…それらはまだ納得しようとしたがこれだけはさすがに見過ごせなかった。
そう、体を這うウナギのような感覚。普通の人間ならば手のひら、指先であろうはずのそれがないのは明らかに普通じゃない。
アイマスクを外した雪路の目に飛び込んできたのは、巨大な…ウナギ？のような怪人の姿だった。

「ふふふ…さすがはブルーラビット。私の正体に気づくとは。
そのとおり、私は…デンキウナギ怪人」

デンキウナギ。その名の通り電気を放つことで獲物を捉えるアマゾンに生息する生物だ。
実はウナギよりナマズ側に属するらしい。
怪人は宣言通り、顔はデンキウナギっぽい顔で、その両腕もにょろにょろと伸縮し蠢く触手じみたデンキウナギが付いていた。

「くっ…そういうことですか。
ナブール帝国の企みでやってきた女性に淫靡なマッサージをして
蕩けさせるお店だったのですね！」

雪路はあわててベッド横にあったビーストコマンダーを手に取る。
だが、ふと思い至る。相手は自分がブルーラビットであると知っていた。
なのにこの変身アイテムはなぜ無事だったのか。
普通であればこれを取り上げて仕舞えば自分は変身できず、嬲られるだけだったはず…。

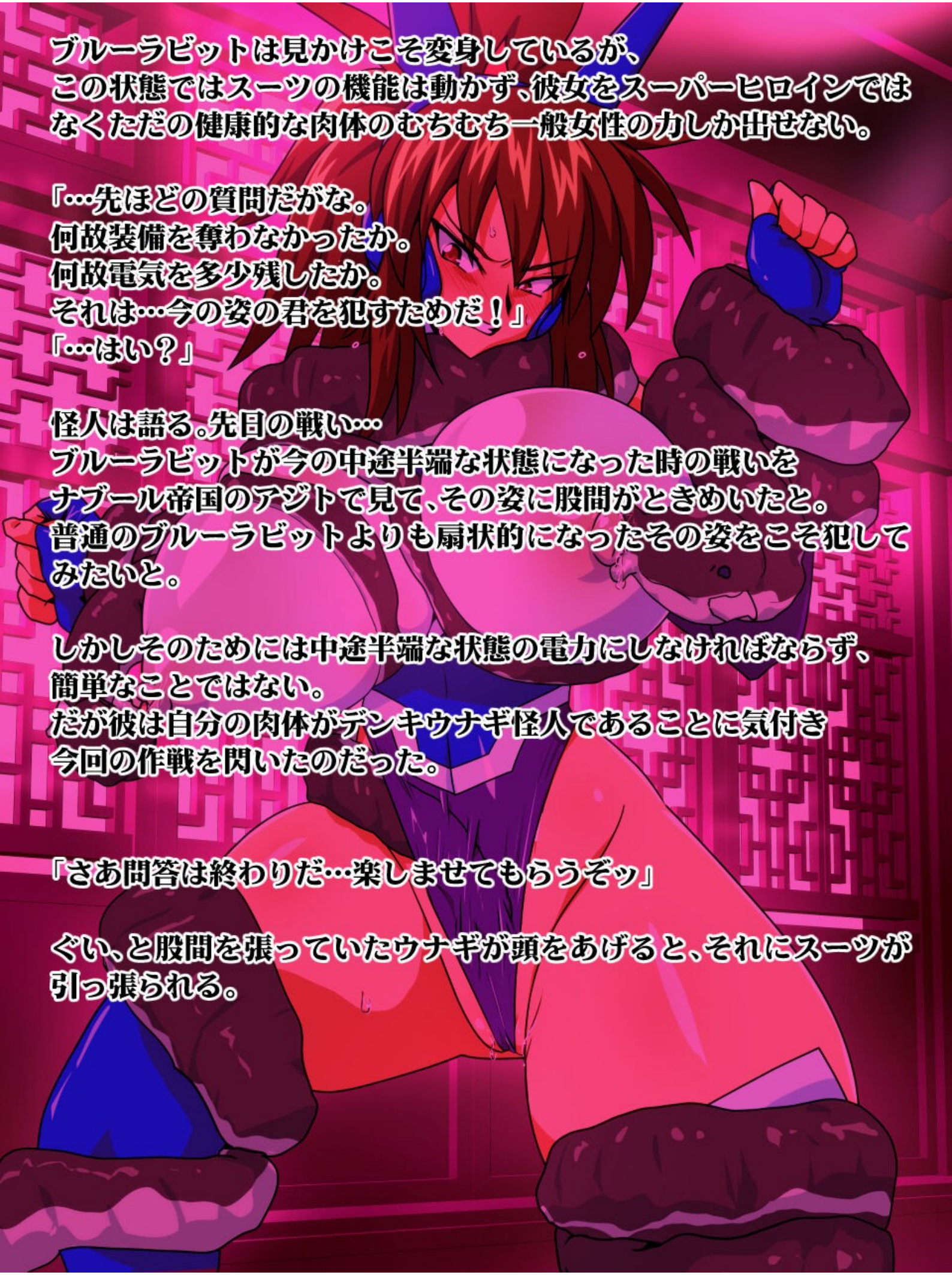
「どうした、変身しないのか？」
デンキウナギ怪人が鼻（どこだろう）で笑い挑発する。
「……何を企んでいるか知りませんが、いいでしょう。獣換っ！！」
変身コードを叫び、ビーストコマンダーを操作する。コマンダーが光を放ち、
雪路の体をその光が覆いブルーラビットのスーツに変わっていき、

止まった。


「あれえ、また！？」
雪路…ブルーラビットは叫び、自分の肉体を見た。
その姿は通常のブルーラビットではなく、中途半端な形態のスーツ。
以前にもこの姿になったことがある。
れは雪路の不注意によりビーストコマンダーの
充電が出来ておらず、装着中に電源が落ちてしまった
結果によるものだった。しかしその屈辱の出来事以来、
充電を怠らぬようにしてきたはずだった。
まさか、と怪人を見るブルーラビット。
「ふふふ…そのまさかさ。施術中にそのコマンダーから
電気を吸い取らせてもらった。途中までな…」
デンキウナギは自分の体内で
電気を作ることができる
らしいので吸収できるっていうのは
またちょっと違うのではないかなと
考えてしまう方もいるかもしれないが、
聡明なる読者の皆様は敵はデンキウナギそのものではなく
デンキウナギ怪人なのでそういう常識は通じない
ことは書くまでもあるまい。


「なぜ…？完全に電気を吸収すればそもそも変身させずに済むのに…
いえ、それ以前にこのコマンダー自体を奪うこともできたはず、
一体あなたの目的はなんです！？」
「ふ…決まっている」
ブルーラビットの問いに怪人は答える。その触手で。
伸びるウナギ触手はブルーラビットの肉体を這い回り、拘束する。
股間の触手もにゅるにゅると伸びてその拘束祭りに参加した。


くっ
このっ……んっ
放してっ…ください…
むにゅっ
ちゅぽ
ちゅぽ
ぎゅっ
ちろちろ
むちっ♡


ブルーラビットは見かけこそ変身しているが、
この状態ではスーツの機能は動かず、彼女をスーパーヒロインではなくただの健康的な肉体のむちむち一般女性の力しか出せない。

「…先ほどの質問だがな。
何故装備を奪わなかったか。
何故電気を多少残したか。
それは…今の姿の君を犯すためだ！」
「…はい？」

怪人は語る。先日の戦い…
ブルーラビットが今の中途半端な状態になった時の戦いを
ナブール帝国のアジトで見て、その姿に股間がときめいたと。
普通のブルーラビットよりも扇状的になったその姿をこそ犯してみたいと。

しかしそのためには中途半端な状態の電力にしなければならず、
簡単なことではない。
だが彼は自分の肉体がデンキウナギ怪人であることに気付き
今回の作戦を閃いたのだった。

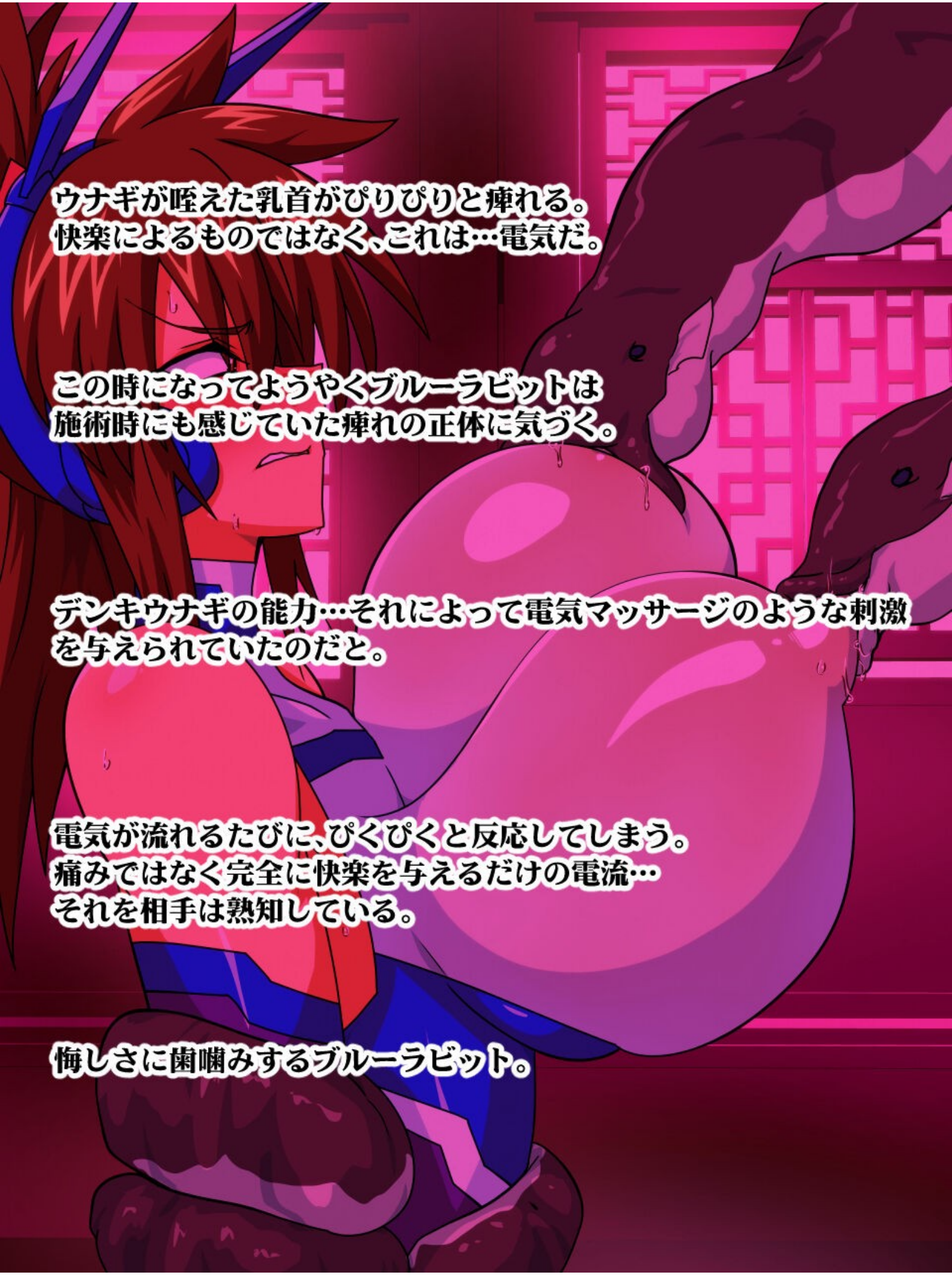
「さあ問答は終わりだ…楽しませてもらうぞッ」

ぐい、と股間を張っていたウナギが頭をあげると、それにスーツが引っ張られる。


おうっ♡
んっ♡
んううっ♡
ぐぐぐっ
ぐんっ
ぐんっ
ぐんっ
ちゅっ
ぱちんっ

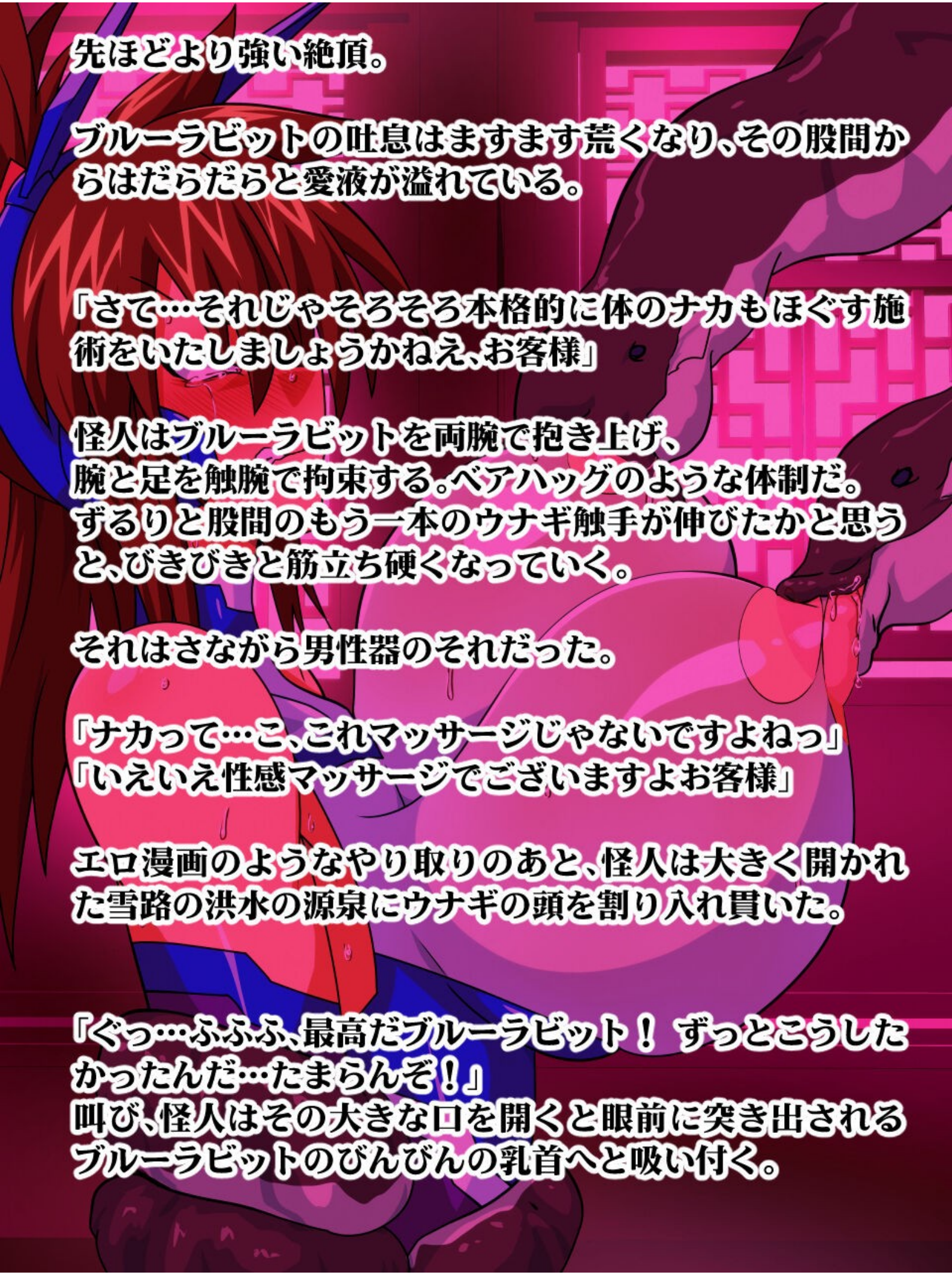

股間のスーツを引っ張り上げられ無理矢理に食い込まされる。先ほどのお茶を飲んでから半勃ちだったクリトリスが擦られて、軽く絶頂するブルーラビット。
彼女の体から力が抜けていくのを確認した怪人は、身体の拘束を強め、身動きを取れないようにしたのちに甘く責めていた両乳首を本格的にウナギに咥えさせる。


ちゃっぽ
ちゃっぽ
くっ…ううっ
ぴくっ
遊ばないでっ…
いるっ…
ぶるんっ


ウナギが咥えた乳首がぴりぴりと痺れる。
快楽によるものではなく、これは…電気だ。
この時になってようやくブルーラビットは
施術時にも感じていた痺れの正体に気づく。
デンキウナギの能力…それによって電気マッサージのような刺激
を与えられていたのだと。
電気が流れるたびに、ぴくぴくと反応してしまう。
痛みではなく完全に快楽を与えるだけの電流…
それを相手は熟知している。
悔しさに歯噛みするブルーラビット。


ぢゅうっ
んんっ
ぢゅ
んくっ


くっ♡
っ♡
ー…っ
ー…？
もう…やめっ…♡
ぢゅっ
ぢゅっ
ぢゅっ
ぢゅっ
ぢゅっ


先ほどより強い絶頂。

ブルーラビットの吐息はますます荒くなり、その股間からはだらだらと愛液が溢れている。

「さて…それじゃそろそろ本格的に体のナカもほぐす施術をいたしましょうかねえ、お客様」

怪人はブルーラビットを両腕で抱き上げ、
腕と足を触腕で拘束する。ベアハッグのような体制だ。
ずるりと股間のもう一本のウナギ触手が伸びたかと思うと、びきびきと筋立ち硬くなっていく。

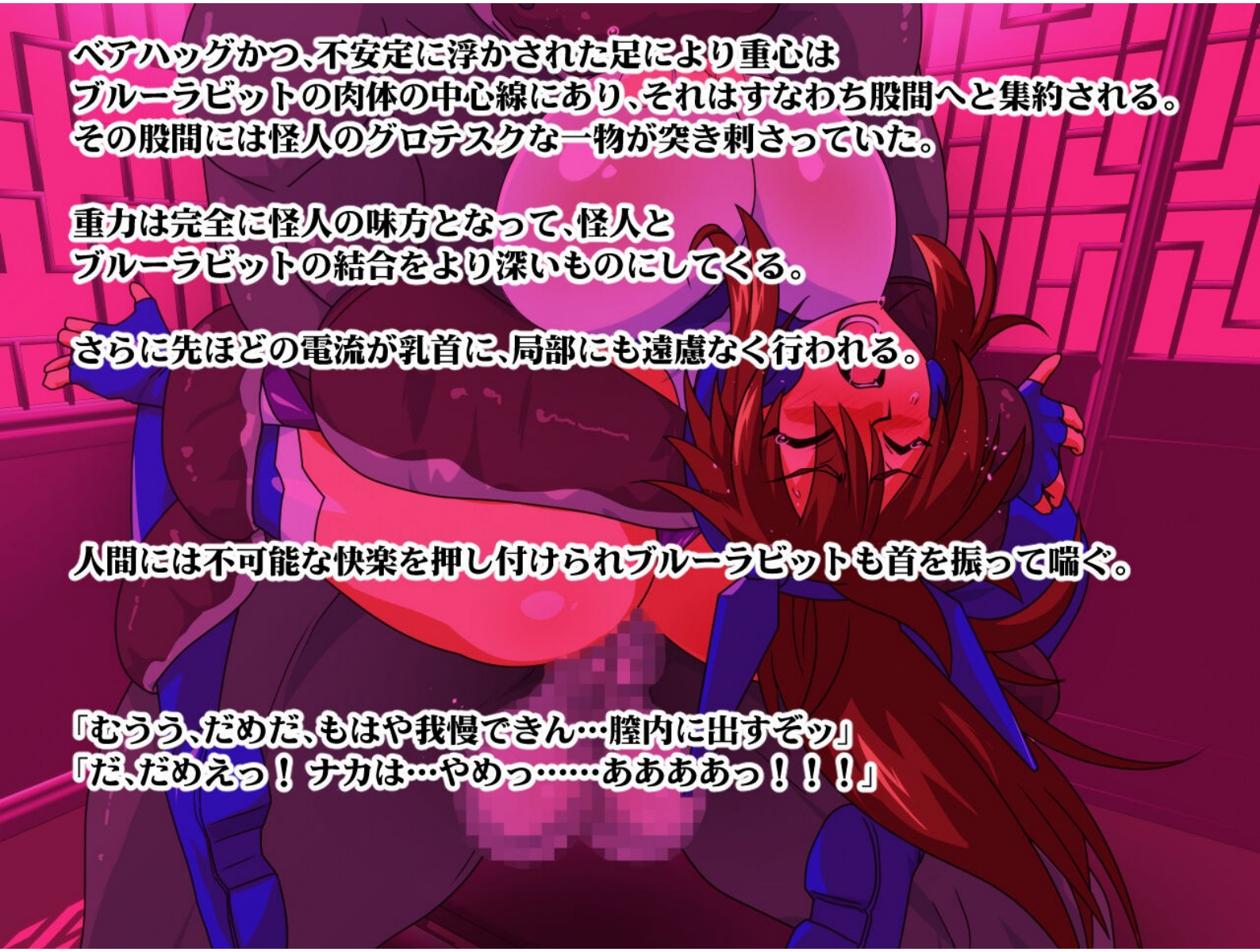
それはさながら男性器のそれだった。

「ナカって…こ、これマッサージじゃないですよねっ」
「いえいえ性感マッサージでございますよお客様」

エロ漫画のようなやり取りのあと、怪人は大きく開かれた雪路の洪水の源泉にウナギの頭を割り入れ貫いた。

「ぐっ…ふふふ、最高だブルーラビット！ ずっとこうしたかったんだ…たまらんぞ！」
叫び、怪人はその大きな口を開くと眼前に突き出されるブルーラビットのびんびんの乳首へと吸い付く。

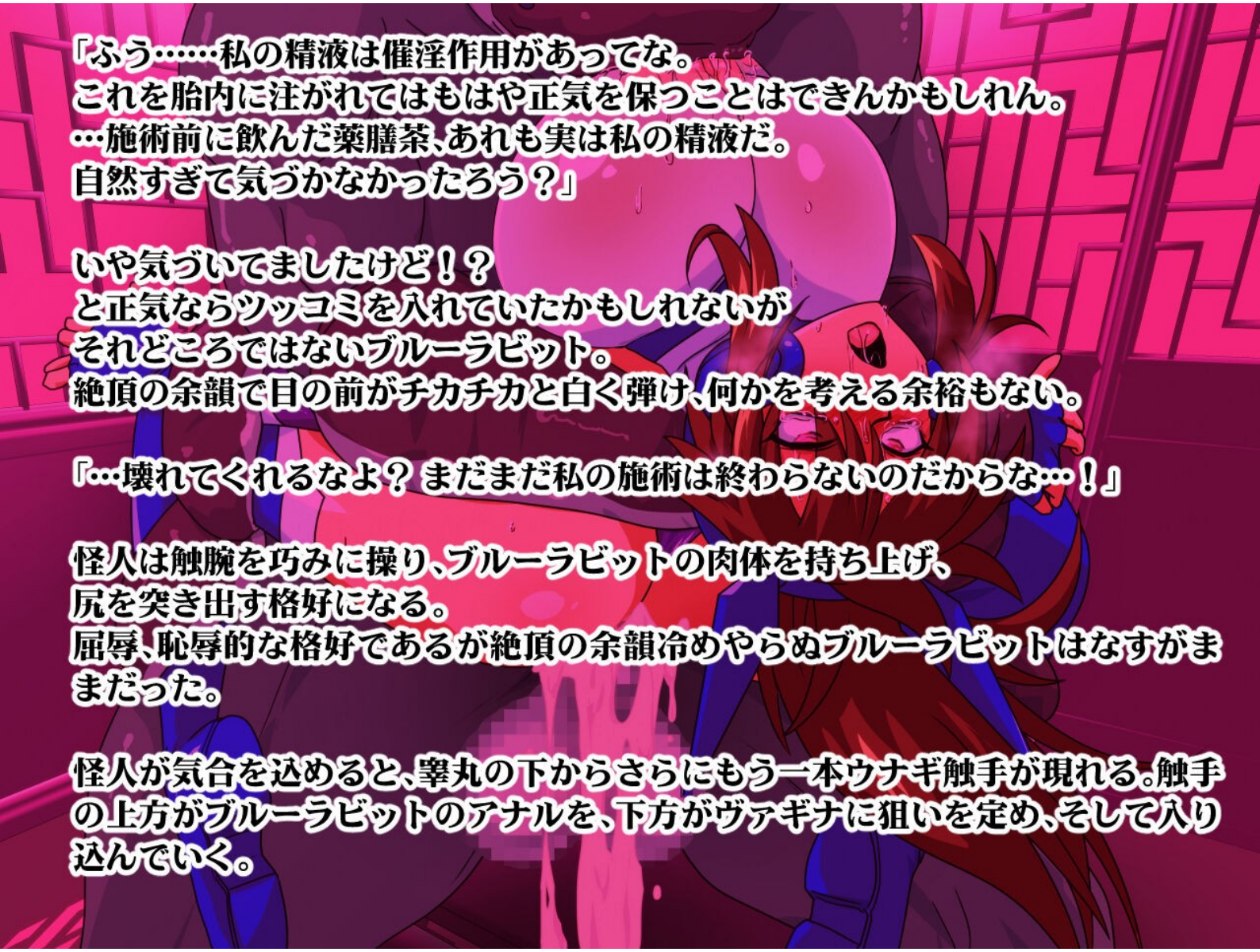

ちゅっちゅっ
ちゅっ
あ♥
お♥
お♥
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
一緒にだめぇっ♥


ベアハッグかつ、不安定に浮かされた足により重心は
ブルーラビットの肉体の中心線にあり、それはすなわち股間へと集約される。
その股間には怪人のグロテスクな一物が突き刺さっていた。
重力は完全に怪人の味方となって、怪人と
ブルーラビットの結合をより深いものにしてくる。
さらに先ほどの電流が乳首に、局部にも遠慮なく行われる。
人間には不可能な快楽を押し付けられブルーラビットも首を振って喘ぐ。
「むううん、だめだ、もはや我慢できん…膣内に出すぞッ」
「だ、だめえっ！ ナカは…やめっ……あああああっ！！！」

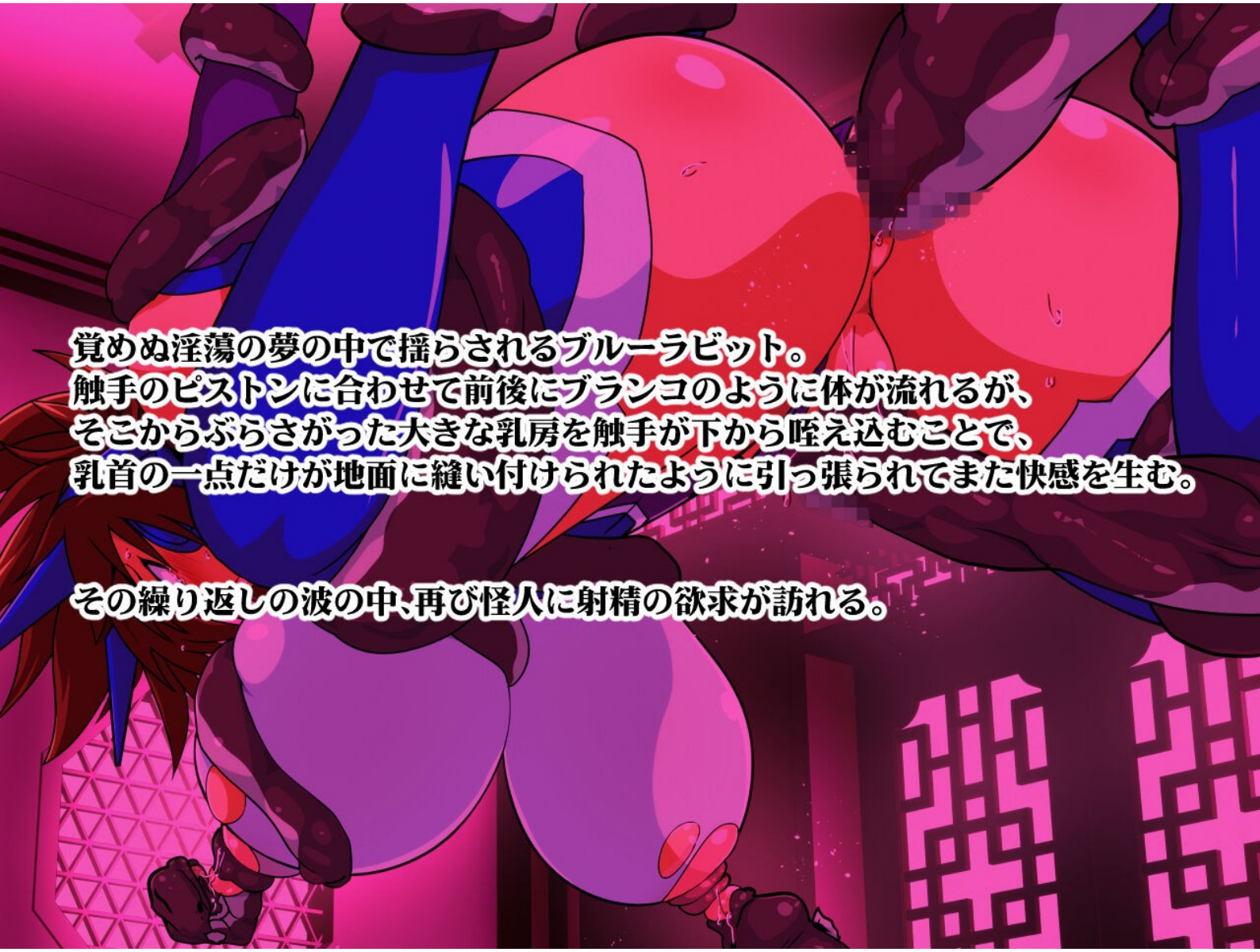

ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ


無遠慮に注ぎ込まれていく精液。
触手型の陰茎はまさに水を求めるうなぎがごとく膣内で暴れ回り、精液を膣壁に塗りたくり刺激していく。
身動きできず好き放題される恥辱感、腰を抑えられて呼吸がままならぬ圧迫感、大事な場所に愛のない子種を注がれる嗜虐感。
何よりそれらが重なり無理矢理引き起こされる絶頂。
そういったものがブルーラビットの脳内を駆け巡り、ブルーラビットの意識は快楽の沼に沈んだ。

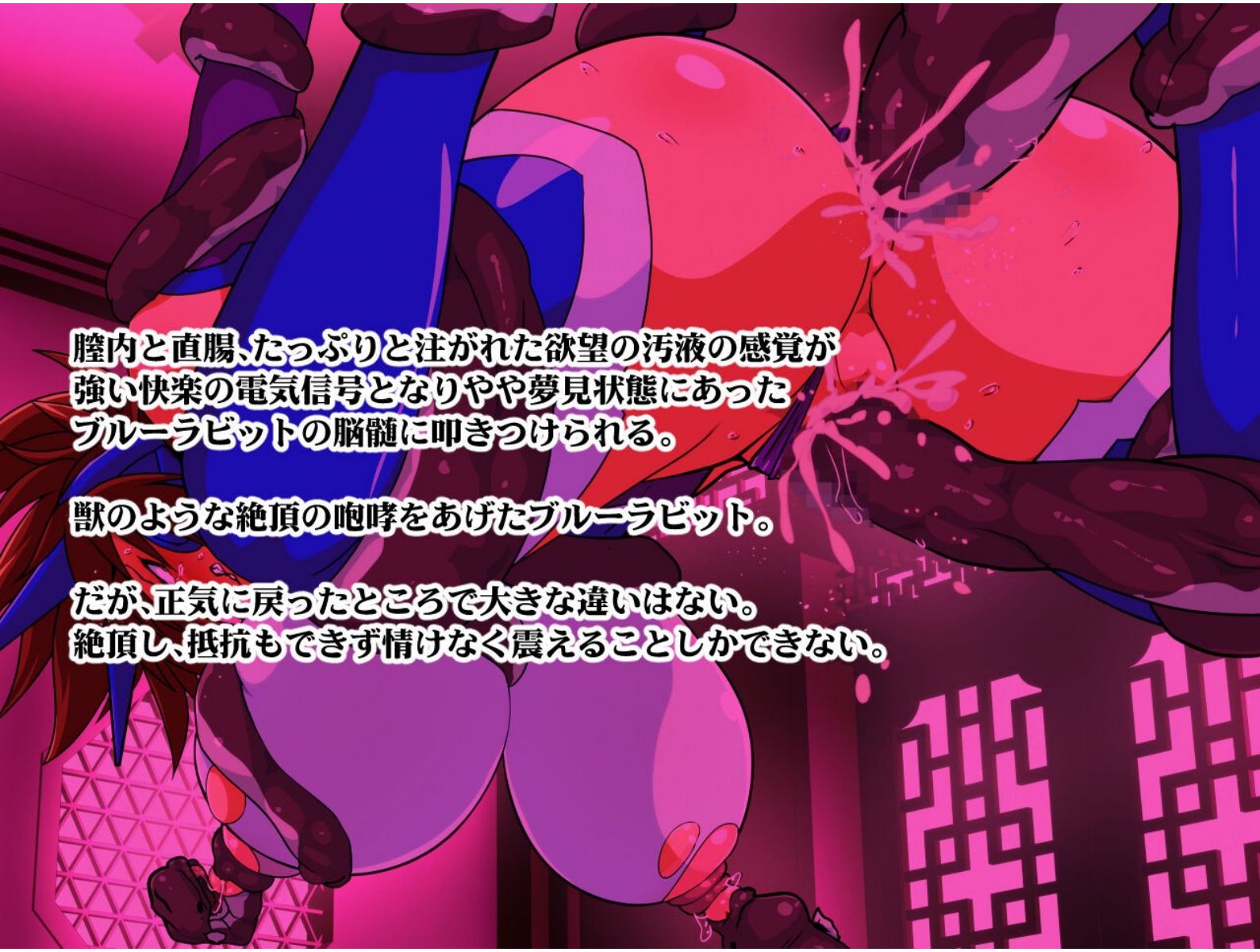

ぉーぃ
ぁ！
ぁぃ
ぐぐぐ


「ふう……私の精液は催淫作用があってな。
これを胎内に注がれてはもはや正気を保つことはできんかもしれん。
…施術前に飲んだ薬膳茶、あれも実は私の精液だ。
自然すぎて気づかなかったろう？」
いや気づいてましたけど！？
と正気ならツッコミを入れていたかもしれないが
それどころではないブルーラビット。
絶頂の余韻で目の前がチカチカと白く弾け、何かを考える余裕もない。
「…壊れてくれるなよ？ まだまだ私の施術は終わらないのだからな…！」
怪人は触腕を巧みに操り、ブルーラビットの肉体を持ち上げ、
尻を突き出す格好になる。
屈辱、恥辱的な格好であるが絶頂の余韻冷めやらぬブルーラビットはなすがままだった。
怪人が気合を込めると、睾丸の下からさらにもう一本ウナギ触手が現れる。触手の上方がブルーラビットのアナルを、下方がヴァギナに狙いを定め、そして入り込んでいく。

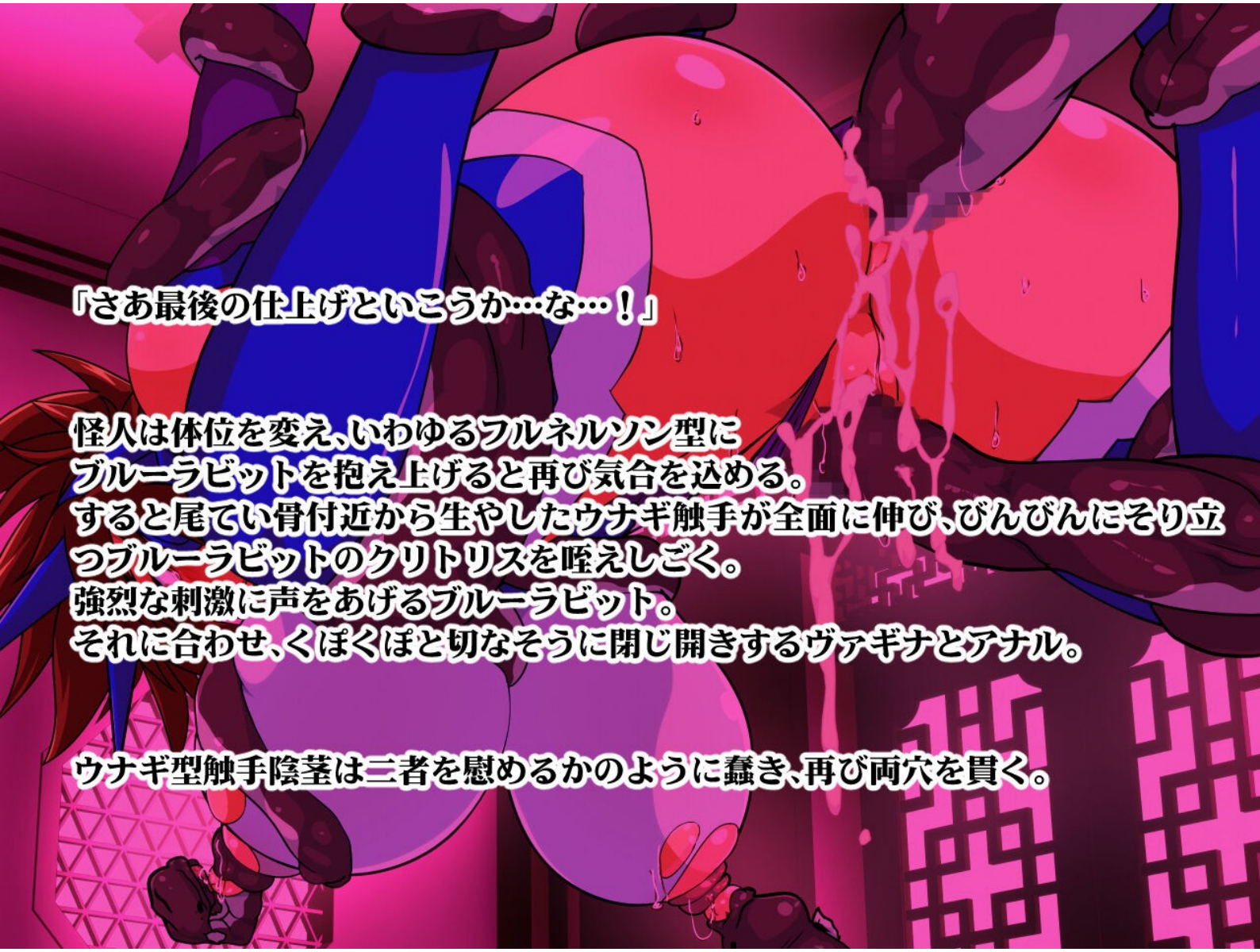
ぬちっ
ぬちっ
ぬぢっ
ぶるんっ♡
ぶるんっ♡
おっ♡
おっ♡
おっ♡
ひくっ


覚めぬ淫蕩の夢の中で揺らされるブルーラビット。
触手のピストンに合わせて前後にブランコのように体が流れるが、
そこからぶらさがった大きな乳房を触手が下から咥え込むことで、
乳首の一点だけが地面に縫い付けられたように引っ張られてまた快感を生む。
その繰り返しの波の中、再び怪人に射精の欲求が訪れる。

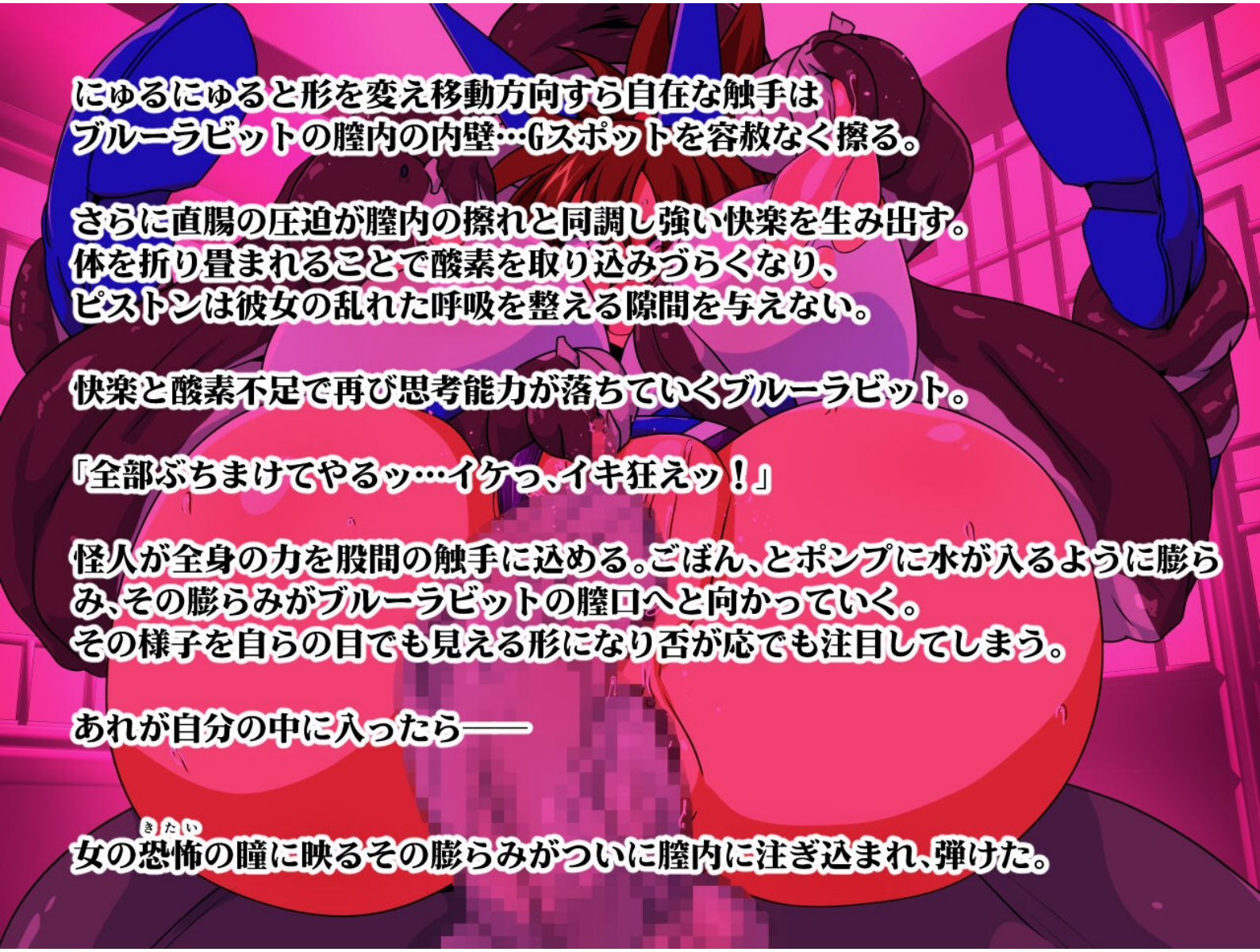

ぐちゅ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ


膣内と直腸、たっぷりと注がれた欲望の汚液の感覚が
強い快楽の電気信号となりやや夢見状態にあった
ブルーラビットの脳髄に叩きつけられる。
獣のような絶頂の咆哮をあげたブルーラビット。
だが、正気に戻ったところで大きな違いはない。
絶頂し、抵抗もできず情けなく震えることしかできない。

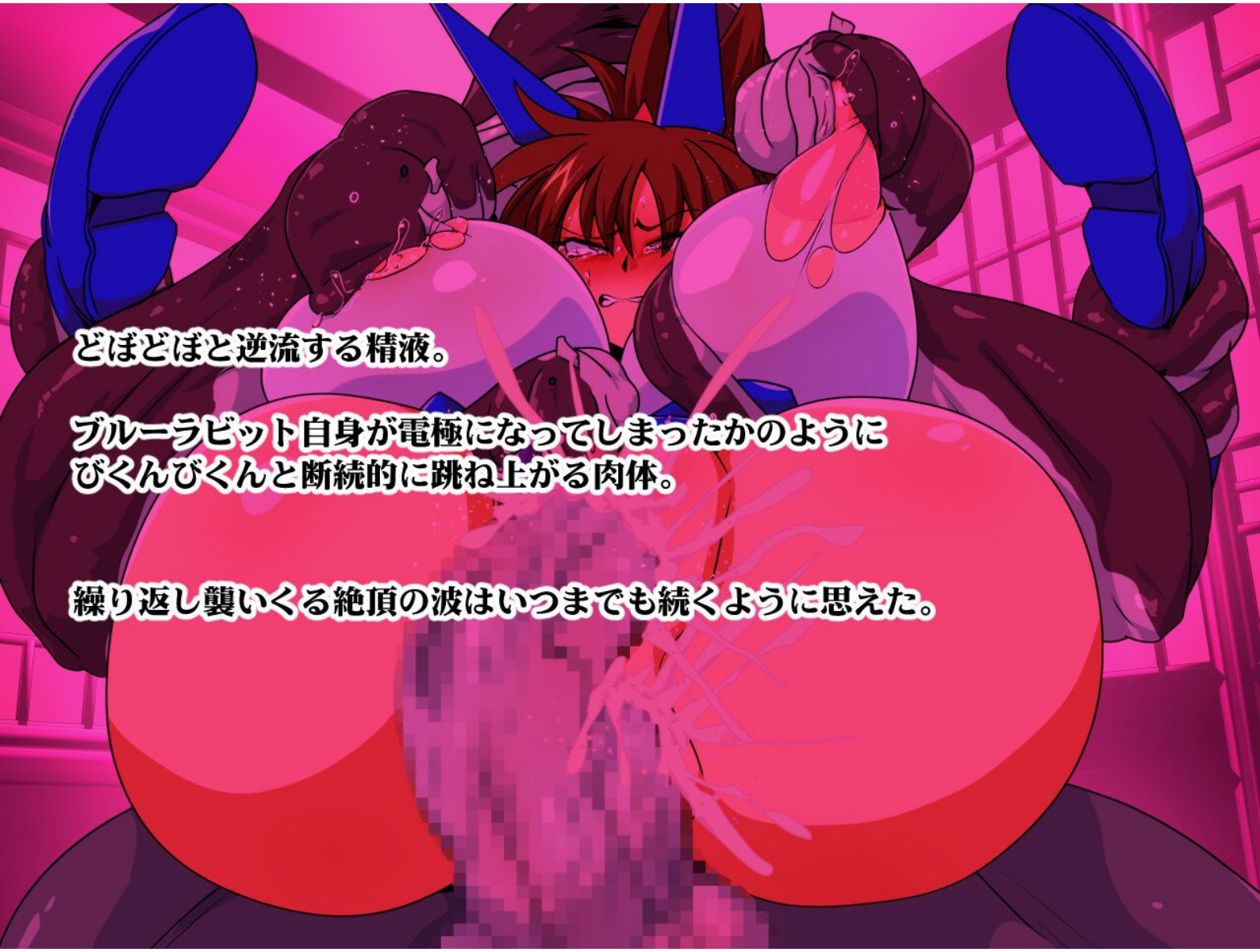

ハスハス
クンクン
クンクン
ペロペロ
ペロペロ
ペロペロ


「さあ最後の仕上げといこうか…な…！」
怪人は体位を変え、いわゆるフルネルソン型に
ブルーラビットを抱え上げると再び気合を込める。
すると尾てい骨付近から生やしたウナギ触手が全面に伸び、びんびんにそり立つブルーラビットのクリトリスを咥えしごく。
強烈な刺激に声をあげるブルーラビット。
それに合わせ、くぽくぽと切なそうに閉じ開きするヴァギナとアナル。
ウナギ型触手陰茎は二者を慰めるかのように蠢き、再び両穴を貫く。

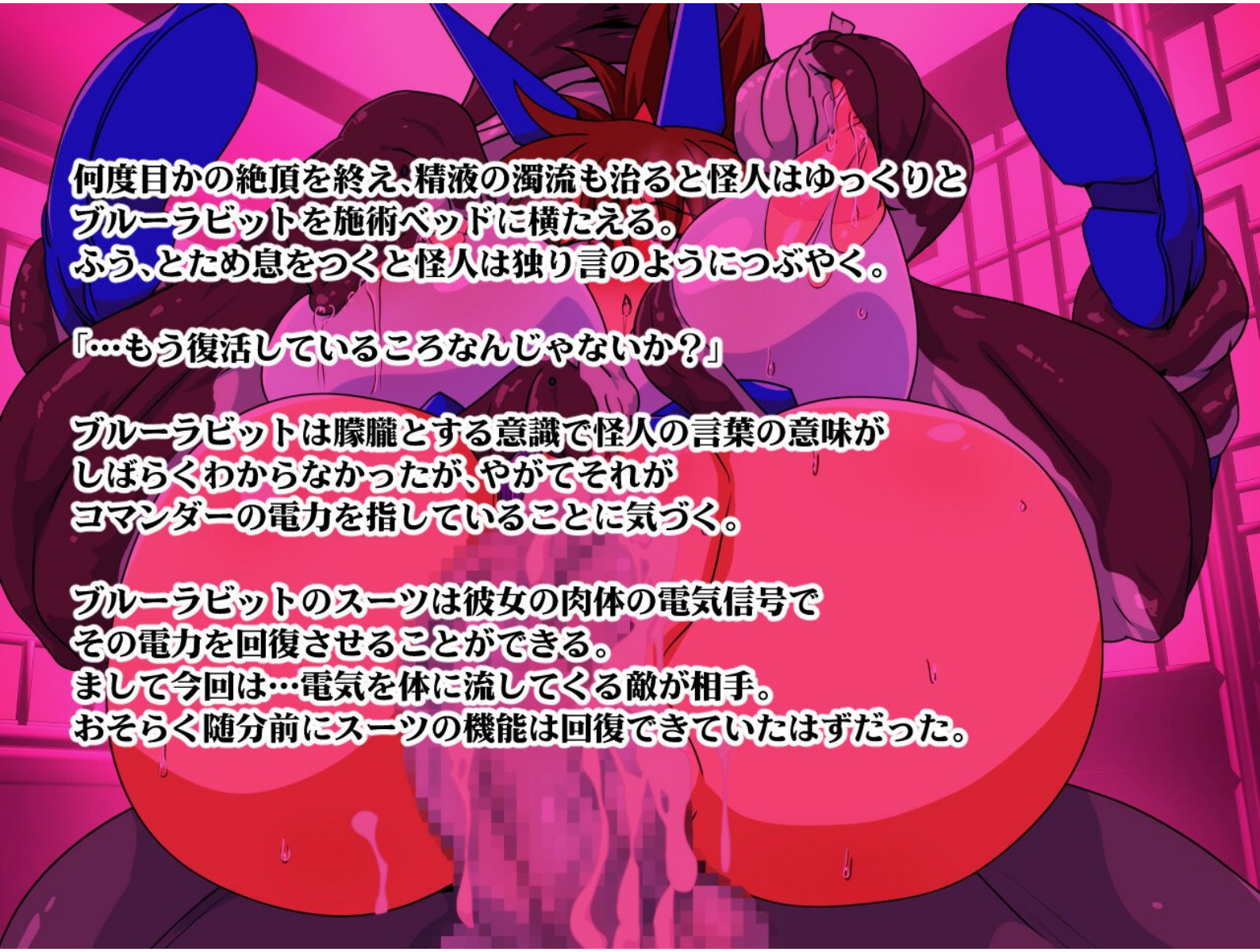

ちゅこ ちゅこ ちゅこ ちゅこ
ぼちゃっ
どちゃっ
ぼちゃっ
どちゃっ

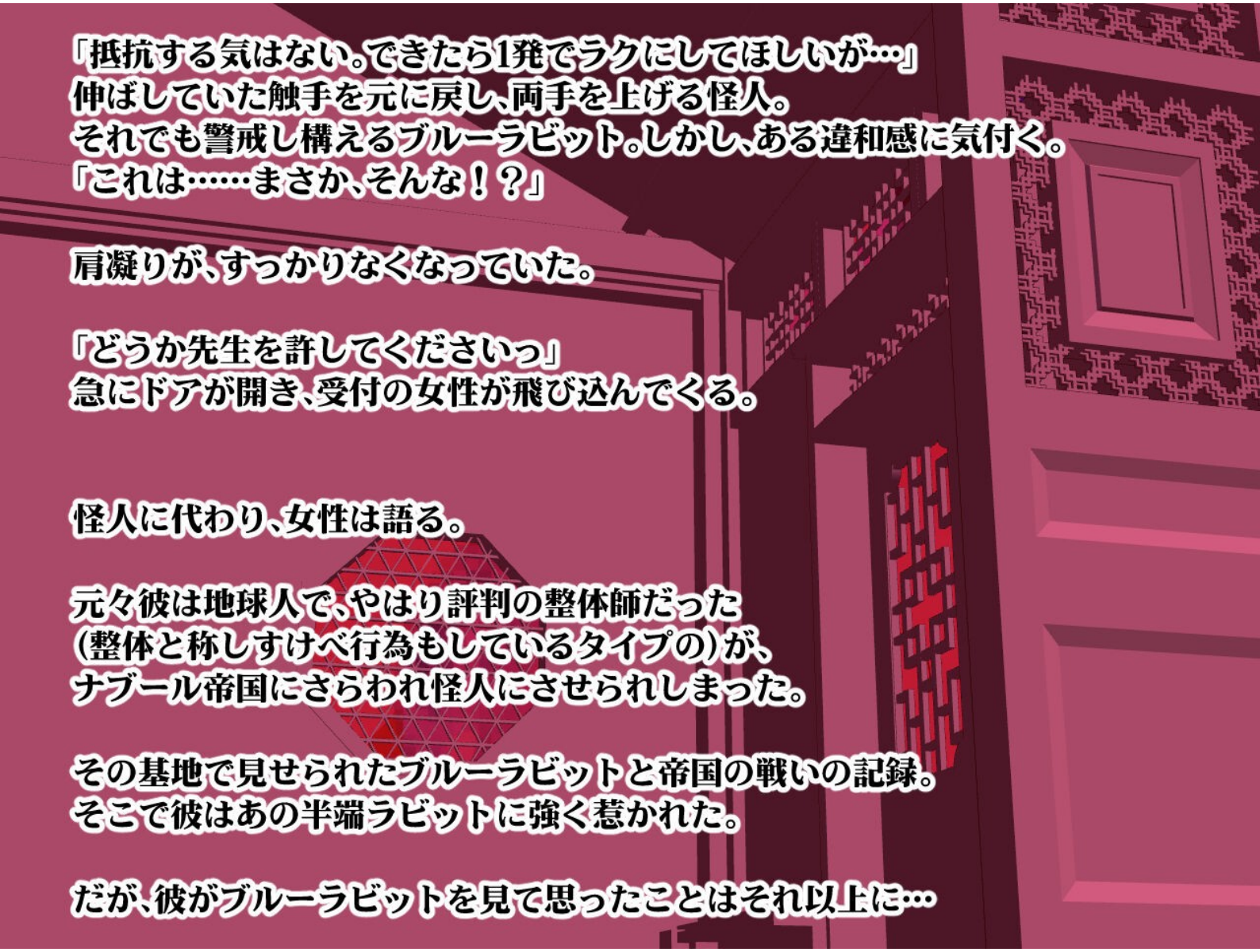

にゅるにゅると形を変え移動方向すら自在な触手は
ブルーラビットの膣内の内壁…Gスポットを容赦なく擦る。
さらに直腸の圧迫が膣内の擦れと同調し強い快楽を生み出す。
体を折り畳まれることで酸素を取り込みづらくなり、
ピストンは彼女の乱れた呼吸を整える隙間を与えない。
快楽と酸素不足で再び思考能力が落ちていくブルーラビット。
「全部ぶちまけてやるッ…イケっ、イキ狂えッ！」
怪人が全身の力を股間の触手に込める。ごぼん、とポンプに水が入るように膨らみ、その膨らみがブルーラビットの膣口へと向かっていく。
その様子を自らの目でも見える形になり否が応でも注目してしまう。
あれが自分の中に入ったら――
女の恐怖（きたい）の瞳に映るその膨らみがついに膣内に注ぎ込まれ、弾けた。


んぎゃっ
ごりごりっ!?
ぐりぐりっ
ぐりぐりっ
ぐりぐりっ


どぼどぼと逆流する精液。
ブルーラビット自身が電極になってしまったかのように
びくんびくんと断続的に跳ね上がる肉体。
繰り返し襲いくる絶頂の波はいつまでも続くように思えた。


びくっ♥
びくっ♥
ちゅーっ
ちゅーっ
ひゃー…♡
もぐもぐ
びくっ
びくっ
とぷとぷ
とぷとぷ


何度目かの絶頂を終え、精液の濁流も治ると怪人はゆっくりと
ブルーラビットを施術ベッドに横たえる。
ふう、とため息をつくと怪人は独り言のようにつぶやく。
「…もう復活しているころなんじゃないか？」
ブルーラビットは朦朧とする意識で怪人の言葉の意味が
しばらくわからなかったが、やがてそれが
コマンダーの電力を指していることに気づく。
ブルーラビットのスーツは彼女の肉体の電気信号で
その電力を回復させることができる。
まして今回は…電気を体に流してくる敵が相手。
おそらく随分前にスーツの機能は回復できていたはずだった。


「抵抗する気はない。できたら1発でラクにしてほしいが…」
伸ばしていた触手を元に戻し、両手を上げる怪人。
それでも警戒し構えるブルーラビット。しかし、ある違和感に気付く。
「これは……まさか、そんな！？」
肩凝りが、すっかりなくなっていた。
「どうか先生を許してくださいっ」
急にドアが開き、受付の女性が飛び込んでくる。
怪人に代わり、女性は語る。
元々彼は地球人で、やはり評判の整体師だった
（整体と称しすけべ行為もしているタイプの）が、
ナブール帝国にさらわれ怪人にさせられしまった。
その基地で見せられたブルーラビットと帝国の戦いの記録。
そこで彼はあの半端ラビットに強く惹かれた。
だが、彼がブルーラビットを見て思ったことはそれ以上に…

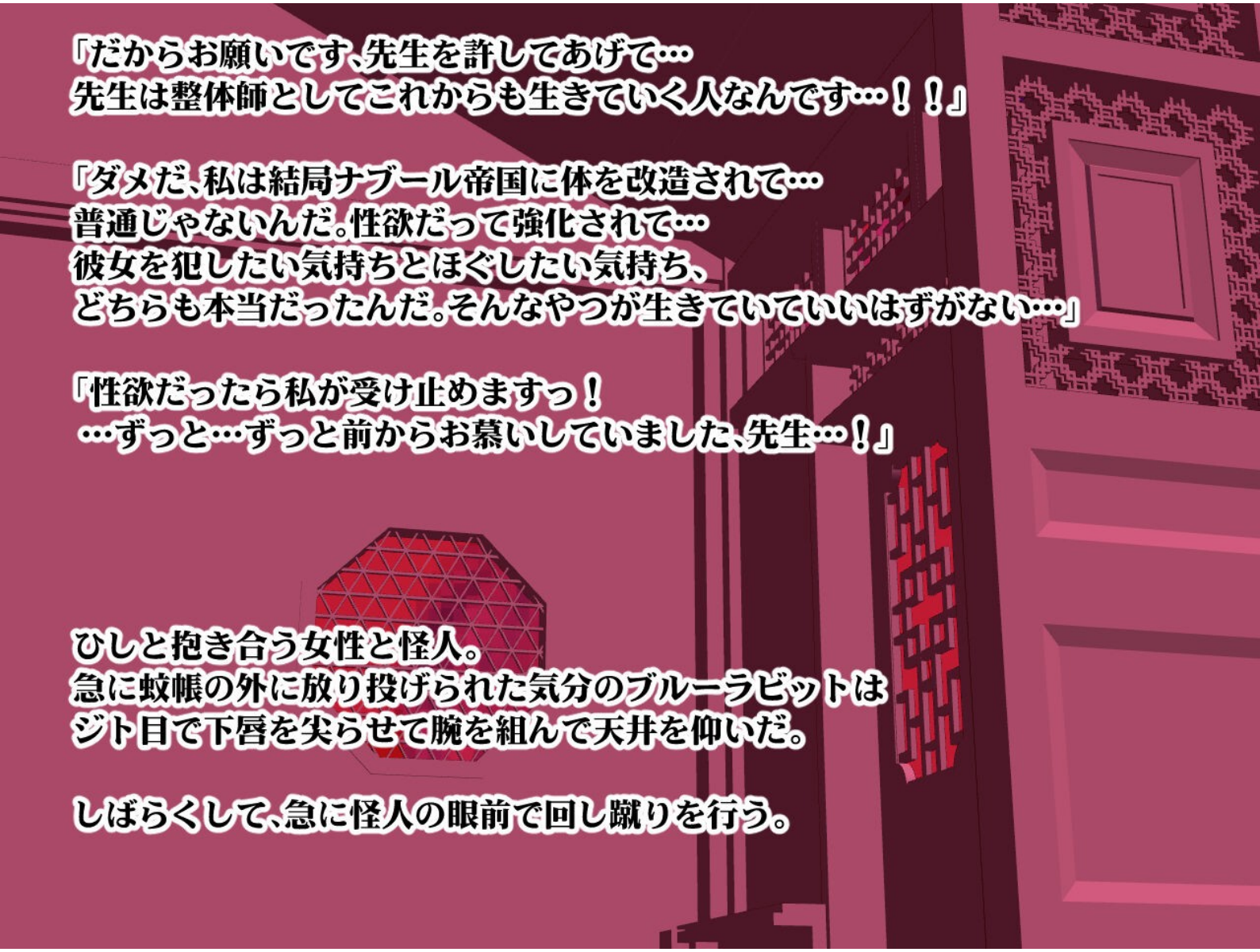
「彼女、あの体…あまりにも凝り固まっている…！！」

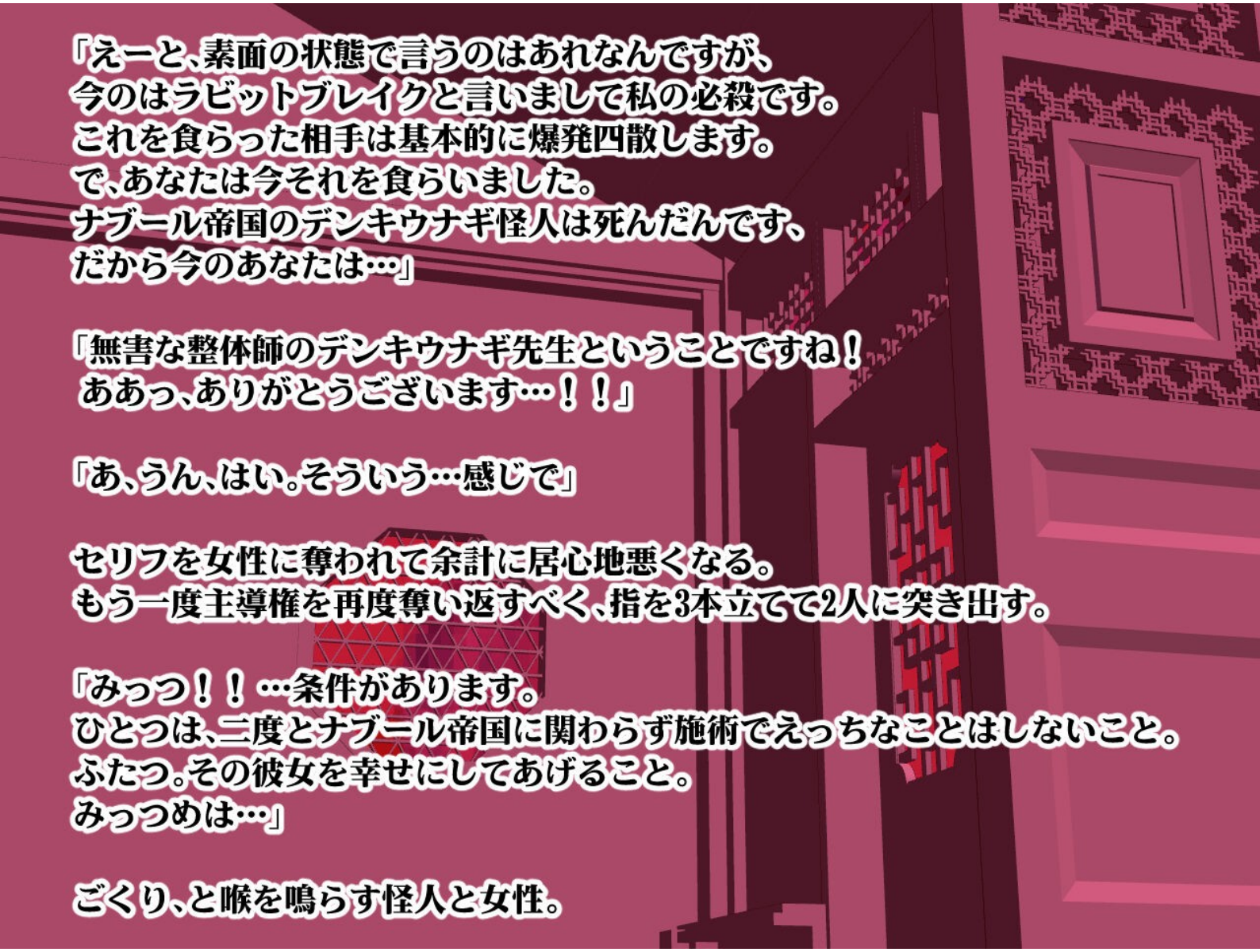
整体師としての魂が震えた。
あの肉体の凝りを解すことこそ自分の使命だ。
気づいた時には帝国を脱走し、
かつて自分が開いていたこの整体院に舞い戻っていた。
受付の女性は、彼の帰りを信じ待ち続けていたのだという。

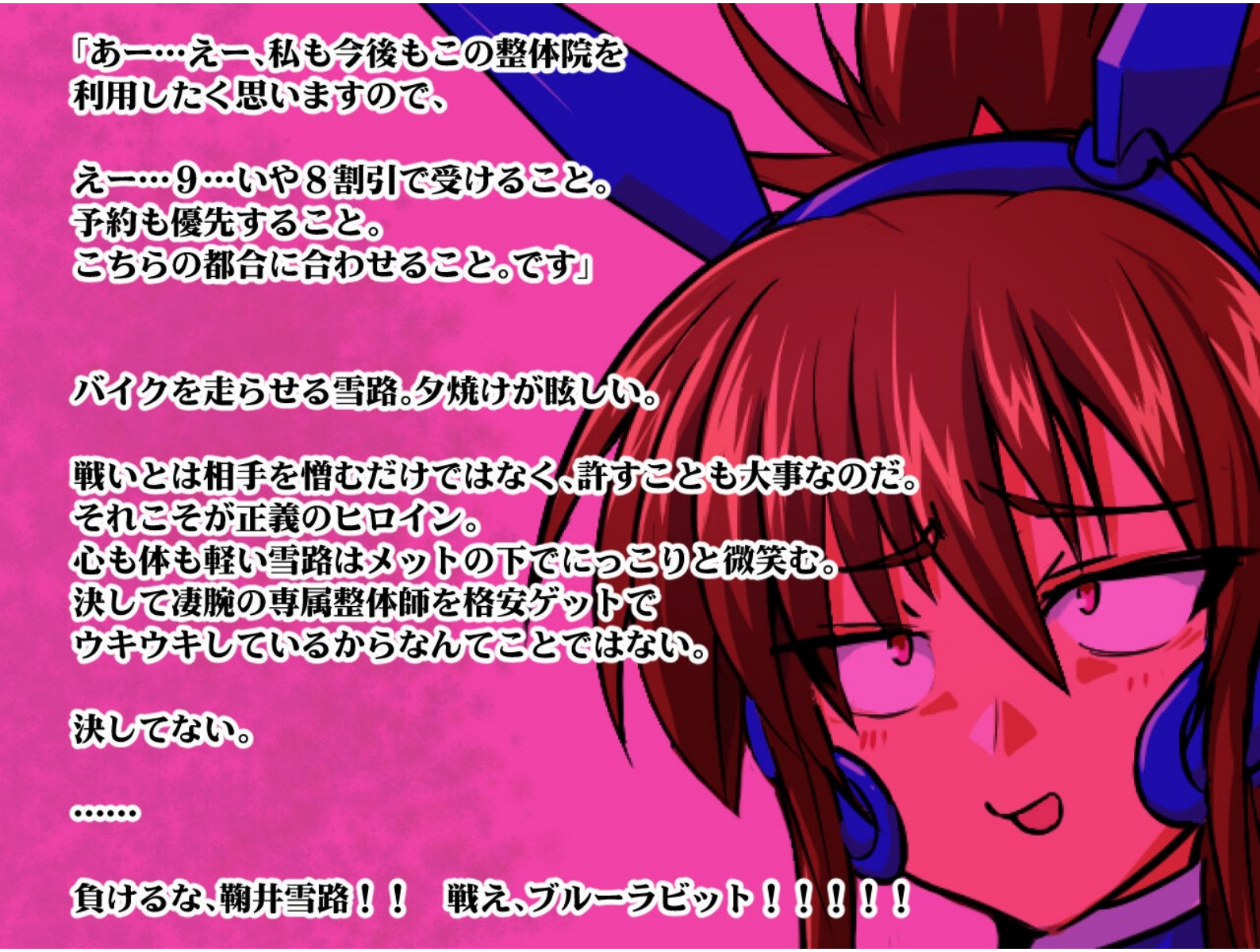
女性の訴えを聞きながら、ブルーラビットは体を捻り続けていた。
セックスの疲労感はあるが体の可動域は明らかに
ここを訪れる前よりもずっと動く。
羽が生えているかと錯覚するように肩が軽く腕がぐるんぐるんと回る。

「それじゃあ…あなたは帝国とは無関係で…さっきまでの行為は…」
「ああ…施術さ。この体になったからこそできるスペシャルな…ね」

先ほどまでの体位の全てがブルーラビットの肉体をリラックスさせ
無理なく筋肉を動かし解し続けるためのものだったという。
さすがにウソくさいなあと思いつつも、
自身の肉体が「うそやないで」と言ってくる。


「だからお願いです、先生を許してあげて…
先生は整体師としてこれからも生きていく人なんです…！！」
「ダメだ、私は結局ナブール帝国に体を改造されて…
普通じゃないんだ。性欲だって強化されて…
彼女を犯したい気持ちとほぐしたい気持ち、
どちらも本当だったんだ。そんなやつが生きていていいはずがない…」
「性欲だったら私が受け止めますっ！
…ずっと…ずっと前からお慕いしていました、先生…！」
ひしと抱き合う女性と怪人。
急に蚊帳の外に放り投げられた気分のブルーラビットは
ジト目で下唇を尖らせて腕を組んで天井を仰いだ。
しばらくして、急に怪人の眼前で回し蹴りを行う。


「えーと、素面の状態で言うのはあれなんですが、
今のはラビットブレイクと言いまして私の必殺です。
これを食らった相手は基本的に爆発四散します。
で、あなたは今それを食らいました。
ナブール帝国のデンキウナギ怪人は死んだんです、
だから今のあなたは…」
「無害な整体師のデンキウナギ先生ということですね！
ああっ、ありがとうございます…！！」
「あ、うん、はい。そういう…感じで」
セリフを女性に奪われて余計に居心地悪くなる。
もう一度主導権を再度奪い返すべく、指を3本立てて2人に突き出す。
「みっつ！！…条件があります。
ひとつは、二度とナブール帝国に関わらず施術でえっちなことはしないこと。
ふたつ。その彼女を幸せにしてあげること。
みっつめは…」
ごくり、と喉を鳴らす怪人と女性。


「あー…えー、私も今後もこの整体院を
利用したく思いますので、
えー…9…いや8割引で受けること。
予約も優先すること。
こちらの都合に合わせること。です」
バイクを走らせる雪路。夕焼けが眩しい。
戦いとは相手を憎むだけではなく、許すことも大事なのだ。
それこそが正義のヒロイン。
心も体も軽い雪路はメットの下でにっこりと微笑む。
決して凄腕の専属整体師を格安ゲットで
ウキウキしているからなんてことではない。
決してない。
……
負けるな、鞠井雪路！！　戦え、ブルーラビット！！！！！


くっ
このっ……んっ
放してっ…ください…
むにゅっ
ちゅぽ
ちゅぽ
ぎゅっ
ちろちろ
むちっ♡

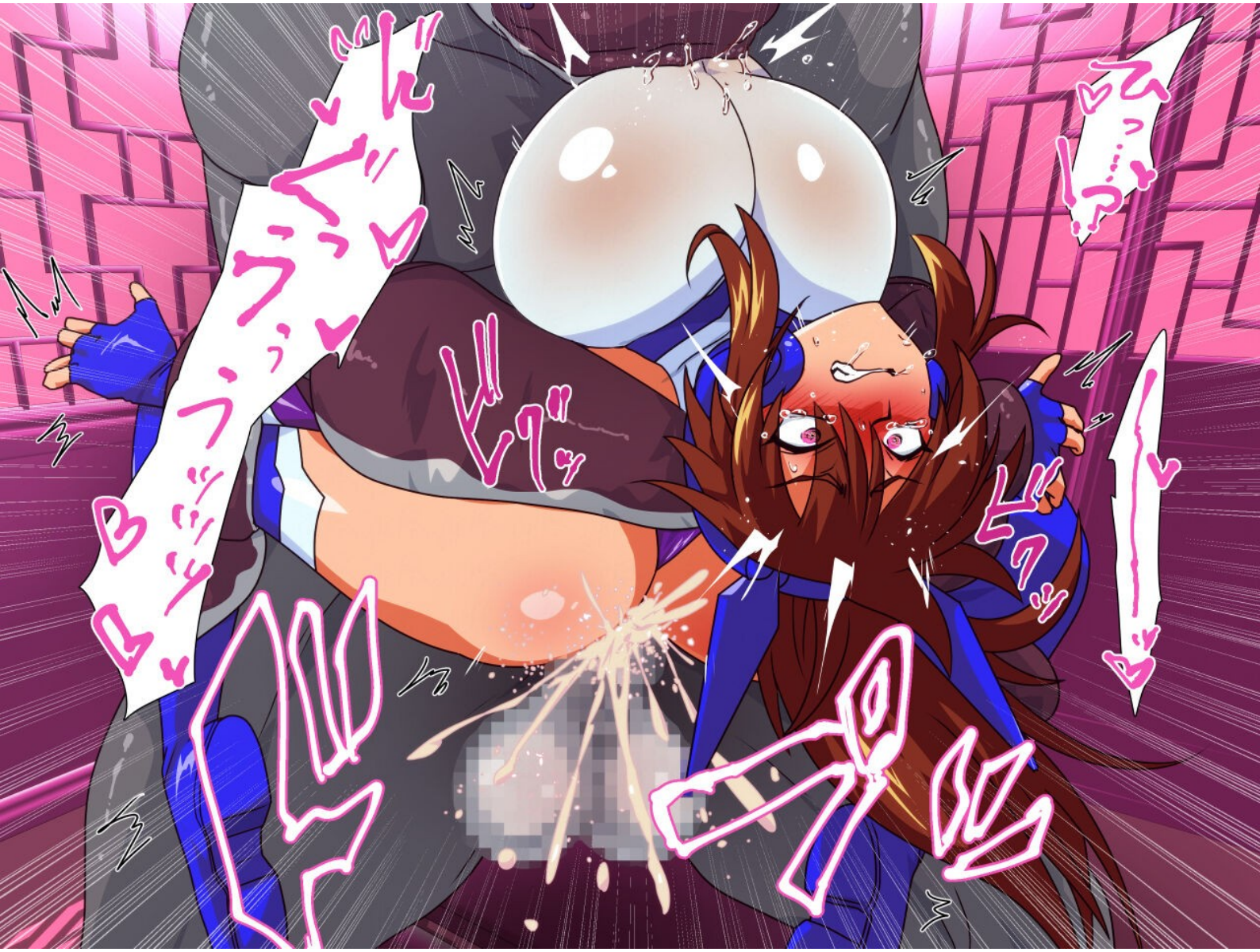

おうっ♡
んっ♡
んううっ♡
ぐぐぐっ
ぐんっ
ぐんっ
ぐんっ
ちゅっ
ぱちんっ


ちゃっぽ
ちゃっぽ
くっ…ううっ
ぴくっ
遊ばないでっ…
いるっ…
ぶるんっ


ぢゅるっ
んんっ
ぢゅ
んくぅっ


くっ♡
っ♡
ー…っ
ー…？
もう…やめっ…♡
ぢゅっ
ぢゅっ
ぢゅっ
ぢゅっ
ぢゅっ


ちゅっちゅっ
あ♥
ちゅっ
お♥
お♥
一えっ♥
だめぇ♥
ぱちゅっ
ぱちゅっ


ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ


ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ

ぬちっ
ぬちっ
ぬぢっ
おっ♡
おっ♡
おっ♡
ひくっ
ぷるんっ♡
ぷるんっ♡


ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ


ハスハス
クンクン
クンクン
ペロペロ
ペロペロ
ペロペロ


ちゅこ ちゅこ ちゅこ ちゅこ
ぼちゃっ
どちゃっ
ぼちゃっ
どちゃっ


ぐぐぐ


びくっ♥
びくっ♥
ちゅーっ
ちゅーっ
ひゃー…♥
もぐもぐ
びくっ♥
びくっ♥
ちゅーっ
とぷとぷ
とぷとぷ
とぷとぷ
とぷとぷ


くっ
このっ……んっ
放してっ…ください…
むにゅっ
ちゅぽ
ちゅぽ
ぎゅっ
ちろちろ
むちっ♡


おうっ♡
んっ♡
んううっ♡
ぐぐぐっ
ぐんっ
ぐんっ
ぐんっ
ちゅっ
ぱちゅん


ちゃっぽ
ちゃっぽ
くっ…ううっ
ぴくっ
遊ばないでっ…
いるっ…
ぶるんっ


ぢゅうっ
んんっ
ぢゅ
んくっ


くっ♡
っ♡
ー…っ
ー…？
もう…やめっ…♡
ぢゅっ
ぢゅっ
ぢゅっ
ぢゅっ
ぢゅっ


ちゅっちゅっ
ちゅっ
あ♥
お♥
お♥
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
一緒にだめぇっ♥


ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ


ぉーぃ
ぁ！
ぁぃ
ぐぐぐ

ぬちっ
ぬちっ
ぬぢっ
ぶるんっ♡
ぶるんっ♡
おっ♡
おっ♡
おっ♡
ひくっ


ぐちゅ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ


ハスハス
クンクン
クンクン
ペロペロ
ペロペロ
ペロペロ


ちゅこ ちゅこ ちゅこ ちゅこ
ぼちゃっ
どちゃっ
ぼちゃっ
どちゃっ


んぎゃっ
ごりごりっ!?
ぐりぐりっ
ぐりぐりっ
ぐりぐりっ


びくっ♥
びくっ♥
ちゅーっ
ちゅーっ
ひゃー…♡
もぐもぐ
びくっ
びくっ
とぷとぷ
とぷとぷ























































